

広げられる 個人請負スタイル

配達員の青年と eats

ジャーナリスト 東海林 智



町で頻繁に見られるようになった配達

政府方針で進められている 雇用によらない働き方

雇用によらない働き方を広げて行くという政府の方針。「個人の能力を最大限に活用して稼いでほしい」「自由に自らの時間の使い道を決められる」という売り文句を単純に信じる人はもはやいないとは思うのだが、こうした働き方はじわじわと広げられているように見える。

日雇い派遣と似ている

昨年5月、2年半勤務した新潟県から東京に戻り、目に付いたのは、葛(つづら)のような四角いリュックを背負い、スポーツタイプ自転車などで駆け抜ける若者の姿。その彼らが、政府も勧める最先端スタイルの個人請負「ウーバーイーツ」で働く人々だ

と理解するには、その時間ばかりでなかった。なぜなら、都心部では数分に一度と言ってもおかしくないぐらい、頻りに姿を見かけるからだ。路上で止まっている彼らは、たいていスマホを凝視している。画面上で配達先を探しているのか、あるいは新しい仕事が表示されるのを待っているのか、ともかくスマホから目を離さない。話を聞いてみたのだが、あまりにスマホを熱心に見ているので、声をかけることがためらわれた。ある日、意を決して取材を申し込んでみると、「ちょっと少し休もうとしたところだから良いですよ」と25歳の男性が応じてくれた。彼のことは継続して取材中なので、詳しいことはまた別の機会に

今は食えていいるが…

収入不安定、労災はなし

彼によると、新しい働き方だと思いついてみたら、意外と稼げる仕事だった。気に入って働いていると、最初は良かったが、働き方がある程度定着して広がり、このスタイルで働く人が増えてくると、収入が下がり始めた。そうした中で、安全の問題、収入の不安定さなど、さまざま不備が見え始めたという。日雇い派遣とウーバーイーツの働き手は同じ道をたどっているように見える。

将来への不安と隣り合わせ

最初に語ってくれた25歳の男性には、日雇い派遣との類似点を話した。すると彼は「最後はどうなるんですか」と聞くので、「不安定な雇用と収入で、住居を維持できなくなり、ネットカフェ難民になった人もいた」と正直に告げた。一瞬顔をしかめたが、すぐに僕の手を見つめた。自分も今の収入でいつまでパートの家賃が払えるか不安ですと打ち明け、「でも」と続けた。「最低、



東海林さん

書くつもりだが、彼の紹介で、あと何人かにも接触できた。話を聞いた印象は、「前にもこの話聞いたぞ」という、なんとも言えない既視感があった。もちろん、システムやそもそも雇用契約ではないからいろいろと違うのだが、派遣労働者から聞いてきた実情と重なる。特に、日雇い派遣で働いていた人とは、全体の構成がほぼ一緒なのだ。

もそも雇用契約ではないからいろいろと違うのだが、派遣労働者から聞いてきた実情と重なる。特に、日雇い派遣で働いていた人とは、全体の構成がほぼ一緒なのだ。

最大60%弱引き下げを

メール1本で通知

ウーバーイーツの配達員「報酬を下げるというなら、できる労働組合(ウーバーイーツユニオン)が12月5日、同社に対する抗議声明を发表した。一方的な報酬引き下げと団体交渉の拒否を批判する内容だ。同日の会見で前葉富雄委員長は

報酬下げ説明せよ

UEユニオンが抗議声明

「報酬を下げるというなら、できる理由を団体交渉で説明すべきだ」と訴えて5日、同社に対する抗議声明を发表した。一方的な報酬引き下げと団体交渉の拒否を批判する内容だ。同日の会見で前葉富雄委員長は

抗議声明によると、ウーバーイーツは11月29日、配達員の基本報酬を引き下げた。荷物受取料金を3000円から2650円へ、受け渡し料金を170円から125円へカット。トータルで2割前後の減収になると

いう。メールで通知されただけで、ユニオンは「引き下げる合理的な説明はされていない」と憤る。ユニオンは10月3日の結成後、事故の際の補償や報酬体系の改善などについて団体交渉の開催を要求してきた。今回の報酬引き下げについても団交での説明を求めている。

彼は、ウーバーで働く人が増え、収入が減ったことを嘆きつつも、「冬になれば寒いから働く人も減り、収入が増えるかも知れない」と期待をかけていた。だが、本格的な冬を前に、彼の期待はもうくも崩れることになった。会社は11月29日から、東京千葉、埼玉で働く配達員の基本報酬の引き下げを打ち出した。店から商品を受け取った時の「受け取り料」を3000円から2650円に、注文者に

商品を手渡した際の「受け渡し料」を170円から125円に、店から配達先までの距離に応じて受け取る「距離報酬」を1キロメートル当たり150円から60円に引き下げるといった内容だ。12%から最大60%近い引き下げである。同社は11月20日、配達員にメール1本で通知した。これだけ大きな労働条件の変更が、こんなに簡単にやられるのだ。まるで大企業と中小企業の関係だ――自動

それはとてもなかった。彼は「確かに今回の値下げはひどい。自分の収入も2割以上減るのかな」と口をさがらせた。とはいえ、こんなことも言う。「会社の取り分である手数料も3割から1割に減らしたから配達員にだけ損を押しつけているわけじゃないと思う。事業自体が成り立たなくなれば仕方ないじゃない」。意外や会社の肩を持つ。そして、右目の眉をヒクリとあげて言った。「組合なんか作って友達が言っていた。労働者としての彼を見て、付き合ってきたが、本当に中小の自営業者ではないかと錯覚しそうになった。

「組合なんか作る奴らが…」

彼に連絡を取ってみた。忙しく働いているのだろう、フェイスブック経由で返事が返ってくるまで、2日間かかった。彼の仕事のサイクルでは仕事一段落する午後2時半に待ち合わせ、話を聞いた。案の定怒ってはいた。だが、よく聞くと、会社への怒りは

彼に伝わってきた。なぜなのか、聞いてみた。彼は説明会の際に「皆さんは自営業者ですって言われた。それなのに、労働者の権利とか言ってもしょうがない。自分の力と才覚で稼ぐもんでしょ。彼らは甘っちょろい」と強いつも口調で言った。

彼の心に少し触れたような気がした。もう一つ、「それじゃ、同じ配達員のことをどう思う」と聞いてみた。彼はきっぱり言った。「仲間じゃない。仕事を奪い合う相手だ」。彼にとって同じ仕事で働く者は仲間ではなく競合相手なのだ。

同じ仕事で働く者は「奪い合う相手だ」

彼に聞いた。「本当に会社は今回の引き下げで痛い思いをするのかなあ。手数料が減っても、配達

員の賃下げの方が利益になるから、会社は、損はしないんでないの。そもそも、なんで配達員の賃金下げるのか説明

員は「会社は「会社は『価格の見直し』って。いっぱい運ばばプレミアが付くからもう金は変わらないんだって」と答えた。

でも、確信はないのか、目はオドオドしているように見えた。彼の口調や主張から労働組合を良く思っていないのが

彼にとって同じ仕事で働く者は仲間ではなく競合相手なのだ。